

りに開館の準備をして居た、自分は大使館の上田書記官の紹介で主事のミラー氏に逢ひ自由に館内を見まはることを許されたが、設備の行き届き且つ大袈裟なものには少からず感嘆した、サモエードとかギリヤークとかいふ北方民族の天幕生活の模型などは全く實物大で薄暗い内部には電気仕掛けで竈の火が燃えたり、爐邊に跼んで寒い冬を過して居る有様を認むることが出来たりする様にしてあつたが、各民族の風俗とか使用する器具とかいふ類のものも廣く各地からとりよせて模型と實物とによつて巧みに其實際生活を寫し出し、何人にも一見して要領を得させるやうにしてあつた、館内でアイヌ部の主任のヴシリエフといふ人に逢つたが、氏は此の部の陳列品を整へる爲に、東京にも行つたし、北海道にも、千島にも行つたと語つて居られた、我が國のどこの博物館に斯く迄豊富にアイヌの資料を蒐集陳列して居るものがあらうかと思ふと情けなくならざるを得なかつた。

## コズロフ大佐の蒐集品

コズロフ大佐が度々蒙古西藏境あたりに探險旅行を試み、中でも一九〇七年から一九〇九年にかけての旅行に西夏のカラホトなる都の趾を尋ねあて、夥しい學問上の資料を蒐集して學界を驚かせたことは、當時内外の新聞雜誌にも傳へられた所であつたが、其の中の人類學上の資料即ち繪畫とか彫刻とか或は器具の類などはまた皆此の館内に藏せられてあつた、公爵ウクトムスキーといふ人が此の方の係りであつたので、自分は此の人に依頼して一々此等の史料を見せて貰つたのであつたが、中でも其の立派な繪畫は、所々に記入された未解西夏文字と相待ちて亡び去つた此の地方の文化に對して、深い追懷の念を禁じ得しめないものがあつた、國華の第二百九十六號に出て居